

私

ごとであるが、二〇〇五年から毎年九月に台湾の国立中央大学（以下「中央大」）に出かけている。これは、中央大と東工大の土木工学専攻が共同で開催する社会インフラの防災に関する合同シンポジウムに出席するため、今回で二回目となった。一日半のシンポジウム終了後は、東工大からの参加者と中央大側の有志によって、ポストシンポジウムツアーが行われるが、今回は台中方面であった。その台中から台南に向かう間に嘉義があり、現在は肥沃な農業地帯となっているが、この嘉義と台南にわたる広大な嘉南平原を台湾の大穀倉地帯としたのが、八田與一の手による烏山頭ダムであることは周知の通りである。筆者はこれまでに数回現地を訪れたことがあり、烏山頭ダムや放水路、発電所、記念館、また当時の職員住宅が復元された公園等を見て回る機会を得た。今回、中央大の工学部長で筆者の友人である田永銘教授から『八田與一研究』（台湾・黄昭堂）という日中併記の冊子をいただいたので、その中からいくつかのトピックスを抜き出して、明治日本の土木技術者の矜持を垣間見ることにしたい。

八田與一は金沢一中、四高から帝大工科大学に進み、土木工学科で広井勇博士の指導を受けた。大学卒業後は明治四十三年に台湾総督府に入省し、各地で発電灌漑のための調査を行っている。当時の日本は日清戦争により日本領となつた台湾の経営にあたって、道路、鉄道、飛行

各 人 各 説

明治日本の土木技術者の矜持

東京工業大学 環境・社会理工学院 教授

二羽淳一郎

Junichiro Niwa



場、電信・電話、港湾、病院、衛生、教育等々、真面目に植民地経営に従事している。

烏山頭ダムが建設される以前の嘉南平原は洪水、干ばつ、塩害の三重苦の状況であった。八田與一は、この嘉南平原に堰堤長一、二七三メートル、高さ五六メートル、貯水量一億五千万トンの烏山頭ダムと給水・排水路延長一万六千メートルに及ぶ嘉南大圳を完成させている。工事は大正九年から昭和五年までの十年間に及んだ。この間、当時ダム工法としては、世界最新のセミ・ハイドロリック・フィル工法の採用、当時日本国内でも例を見ないスチームシヨベル、エアードンプカー、ジャイアントポンプ、大型コンクリートミキサ、五六ト機関車等々、最新鋭の大型土木機械の導入、烏山頭ダム建設のための職員宿舍の建設と関連する病院、学校、大浴場、その他娯楽施設の建設等々、如何にこの大工事を早期にまた安全に竣工させるかという点に腐心したことがうかがえる。明治日本にはこのように技術的に卓越した識見とまた同時に過酷な環境に立ち向かう気概を持った土木技術者がいたのである。司馬遼太郎の『坂の上の雲』は日露戦争における秋山好古・真之兄弟らを主人公としたものであるが、土木の分野にも彼らに匹敵する「坂の上の雲」を目指した技術者がいたのである。読者各位には、台湾に行く機会があれば、是非、烏山頭ダムを訪れ、往時の土木技術者の矜持を偲んでいただきたい。